

「美しい心」があつてこそその「美しい国」

——秋来ぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞ 驚かれぬる——

うだるような猛暑だった夏も終わると今年も後半の3ヵ月目。前半は相も変わらずお金のまつわるニュースが多かった。前年からのホリエモンとそれに続く村上ファンド。政界ではお金にからむ疑惑で大臣が辞任、うち一人は自殺まで。どれもカネとモノ中心の考え方、生き方がもたらした結果とも言えるでしょう。

「美しい国」——安倍首相の掲げたモットーは、皮肉にも第一次内閣で自らが任命した閣僚たちが崩してきたようにさえ思われます。この国の美しさについて、創価学会の8月度本部幹部会で池田名誉会長は次のように述べています。

——日本は昔から、春夏秋冬にわたって山川草木が美しい。それはそれとして、根本的に大事なものは、そこに住む人々の「心」が美しいか、美しくないかということであろう。

「美しくない心」——それは例えば、無慈悲、残酷、排他的な心、嫉妬の心、また人を中傷するような心といえよう。

反対に「美しい心」とは、慈悲の心、助け合いの心、尊敬しあう心、平等の心、平和の心、そして建設の心といえるのではないだろうか。

ともあれ日蓮大聖人は、「心こそ大切なれ」と仰せである。大事なものは「心」である。うわべではない。(中略)また大聖人は、御書の中で「衆生の心が汚れば、住む国土も汚れ、心が清ければ国土も清い」との経文を引かれ、清らかな国土といっても、ただ心の善悪によると示されている。

美しい心があつて、はじめて美しい国となる。最も美しい、最も強い「太陽の心」で、時代の闇を明るく照らしてまいりたい。平和と文化の大道を、堂々と進んでまいりたい。この強い心こそ「仏の心」である。「創価の心」なのである——(8月5日付聖教新聞)

私も、この8月で創価学会に入会して満46年となりました。草創期から現在に至る活動は、形の上では大きな変化を経てきました。いろんな批判も受けてきました。でもどんなに時代が変わっても、悩んでいる人を励まし、困っている人を助け、社会の繁栄と世界の平和のために活動をしてきたことは、私自身が身をもって実感してきています。自分のことだけを考えている人が多い社会の中で、こんなにも他の人のことに思いをいたす人々のいる団体は極めて少ないでしょう。



一例です。私が大学生だった入会当時、よく面倒を見てくれた先輩のNさんは中卒、しかも元やくざの組員でした。なんとかやくざから足を洗いたいと思った。そのためには指をつめなければなりません。それを避けるために逃げ回り、飛び込んだ先がたまたま学会員の家だったというのです。そしてその家族の話と面倒見のよさからNさんは入会、結果的に指をつめることなく



やくざから抜け出すことができたといいます。

入会後のNさんは、誰に対しても面倒見がよく、みんなから頼りにされていました。社会に迷惑をかけ嫌われていた人間が、感謝される人間へと変わっていったのです。まさに仏法でいう「人間革命」の一事例です。今の私があるのも、氏の前向きな生き方と激励のおかげと心から感謝、今度は自分が悩んでいる人や後輩の力になってあげたいと決意しているところです。

私に限らず、最初は貧しさや病苦を乗り越え、幸せになりたい一心で入会する人が多い。しかし、いつしか自分の悩みを抱えながらも、他者の幸せを願い行動できる境涯へと心が変わっていく点は、入会後に共通する生き方です。こんな美しい心の集まりが創価学会の世界なのです。

「蔵の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」と仏典にあるように、私も「心の財(美しい心)」を第一とする社会を築いてこそ、美しい国が築かれていくと思っています。**（私自身の信仰体験を「エッセイ・コラム」の欄に載せております）**